様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２５２９

研究課題名（和文）フランス19世紀前半の文学・芸術における地方色と異国性

研究課題名（英文）Local Colors and Exoticism in the Early Nineteenth Century French Literature and Art

研究代表者
博多　かおる（Hakata, Kaoru）

上智大学・文学部・教授

研究者番号：６０３６８４４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：フランス近代文学・音楽・芸術にしばしば見られる、地方固有の風習や伝統を探求し、書き留めようという野心と、異質な文化の要素を作品に取り込もうという動きの関係を、具体的な作品分析をもとに明らかにした。　文学についてはバルザック、メリメ、ジョルジュ・サンドらの小説における私生活内部の境界への着目が、イメージの呼応や、夢想をつなぐ仕組みの創造などによって、遠い場所への憧憬としばしば共鳴することを見た。音楽・絵画作品においても、しばしば文学と連携したかたちで、地方性を感じさせる主題が、新しい色彩や音色、作品構造の探求と結びついたこと、外へと開かれていくと同時に細部を見つめる作品を生み出したことを見た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
異国趣味という主題は、19世紀文学と芸術を論じる上でしばしば取り上げられ、近年は、その西洋中心的な思考が批判されてきた。本研究は、作品の精密な読解をもとにこの問題を新しい角度から検討し、内なるものと異なるものの境界が、国家や文化の領域性のみにもとづいてのみ展開されたわけでないことを示した。たとえば、地方性や日常性の内部に存在する境界や亀裂は、遠い場所についての想像としばしば連動している。そうした考察をつうじて、19世紀フランス文学・芸術・社会を読み解く新しい鍵を提案すると同時に、ジャンルと創造者によって異なる作品構築の手法を比較する視点を提出しえたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I examined specific works of modern French literature, music and art, illuminating how the ambition to pursue and record the indegenous customs and traditions of provincial areas and the motives to incorporate unfamiliar cultural practices interact with each other in them. Literary works by writers such as Balzac, Merimee and George Sand resonate with longings for far away, remote places through the consonating images and the devices for transporting fanciful thoughts. Themes related to local colors in works of music and art, it was revealed in the project, triggered searches for innovative uses of colors, timbres and structures often in tandem with innovations in literature, and helped produce works that combine the gazes toward the external world and the close, inward attention to the details.

研究分野：人文学

キーワード：異国性　地方性　境界　フランス19世紀文学　フランス近代芸術　エグゾティスム

１．研究開始当初の背景

(1) 研究者は、本研究に先立ち、19 世紀ロマン主義の時代から象徴主義の時代に至るまでの文学・音楽作品を対象に、個人が世界と取り結ぶ関係の変化を分析してきた。また近年は、フランス 19 世紀に展開された多様な音楽活動を、社会の変容、各社会グループの感性や趣味の差異を踏まえつつ考察してきた。その結果、社会構造の変化を背景としたアイデンティティの表現を文学・芸術においてさらに細密に検討することが必要となり、そのためにはローカルな空間と異質な空間、自らが属する文化と異文化の関係の表現を調査することが適切であると考えられた。そこで、19 世紀前半の文学において重要である異国性と地方性の探求を研究対象とし、境界を意識する、あるいは境界を越える体験の中で生まれる感覚や着想が、文学と音楽にいかなる表現をもたしてきたのかを探ることとした。

(2) ヨーロッパの異国趣味やオリエンタリズムに関する研究は、境界の設定自体が西洋中心の限定的な視点からなされているという問題をはらんでおり、実際に文学・芸術作品が参照してきたさまざまな境界を十分に捉えられていないことが指摘されてきた。これまでの異国趣味論とそれに対する批判的な研究を読み直し、文学のみでなくそれと深く結びついた音楽・絵画領域をも視野に入れた上で、地方性と異国趣味を関連づける研究が必要と考えられた。

２．研究の目的

本研究は、フランス近代文学・芸術にしばしば見られる、各地方固有の風習や伝統を探求し、書き留めようという野心と、異質な文化の要素を作品に取り込もうという動きの関係を明らかにしようとするものである。地方性の追求も異国趣味も、境界を意識する文学・芸術上の傾向を出発点としており、それらが芸術のジャンルを超えて、境界を問い直す意識を各分野の作品に刻んだのではないかという仮定を検証する。異国趣味の傾向は広い期間にわたって展開されたが、三年間の研究対象は主に 19 世紀前半に限定し、異なる文化についての考察と、この時期に顕著に見られた地方性の探求との関連性を問い直す。

３．研究の方法

(1) 19 世紀フランス文学テクストの詳細な読解と先行研究の調査をもとに、19 世紀前半の文学にあらわれた地方性の描写を分析する。また同時期の音楽・絵画作品を楽曲分析や美術批評、先行研究をもとに分析する。地方色を発見し、個々の土地に特徴的な文化や伝統を書き留めようという動きが、必ずしも文化的・政治的境界の外への想像力の展開を阻むものではなく、実際には異なるものへの恐怖や憧憬をはらみ、照らし出しているのではないかという仮定を検証する。

(2) 文学・芸術作品に描かれた異国性が、何に異質性を見出しているか、境界の問題をいかに考察しているかを、文学・音楽・絵画作品の分析をもとに調査する。この時期のエグゾティスムを、文学や自然科学で扱われた境界の問題、新しい色彩や音色や感覚の探求という側面から論ずる。

４．研究成果

(1)『フランス人の自画像』などパノラマ的なヴィジョンを展開した書物や、地方色と異国性を表現している資料の分析から、個々の地方色を定義し、他と異化する行為が、出版技術の革新

や印刷物の流通条件と切り離せないことが理解された。社会の諸相を並列的に表そうとするパノラマ的な書物の中で、各土地に特徴的な建築物や衣装などの具体的な事物の表象をもとに、地方色が検索可能な文化的位置に置かれることが読み解けた。

境界の概念を探る中で、地理的な境界が時間的な境界としばしば切り離せないこともわかった。ミッシェル・フーコーが示した「ヘテロトピア（異在郷）」の概念に着目し、庭や庭園といった小さな面積における内と外の問題を考察した。高山宏の『庭の綺想学―近代西欧とピクチャレスク美学』（ありな書房、1995 年）等の文献も参照しつつ、内密な空間ともなる庭が、異国性や異時間の引用の場となることを見た。

(2) ヴィクトル・ユゴーの作品における境界の問題を取り上げ、旅行記における国境や海岸の記述を考察した。特に、幼少時の記憶とむすびつく点で重要なバスク地方についての作家の考察を掘り下げた。地方の風景の細部に結びついた感覚的要素、独特な音などが、記憶に独特な遠さの感覚をテクストにもたらすことを見た。またユゴーがバスク地方の特徴を、国境をこえたかたちで把握していること、自らの詩の流通をめぐる体験をとおしてパリとバスクの地理関係を再構築していることを分析した。

(3) ドラクロワら 19 世紀の画家の作品にあらわれた色彩と異国性の問題について調査を行うとともに、テオフィル・ゴーチエの幻想小説における色彩と境界の問題を考察した。そこには、異なる空間に踏み込むという認識を支える色彩の変化が、小説の場合は時間の流れの変化とも関連するかたちで、描きこまれていることが理解された。

(4)「異国」を主題とした 19 世紀のオペラ分析を行った。マイアベーアがパリ・オペラ座での上演を念頭に作曲したグランド・オペラ『アフリカの女』を、19 世紀のやはり異国を舞台とするオペラ(ビゼー作曲『真珠とりの女』、マスネ作曲『タイス』、ドリーヴ作曲『ラクメ』)と比較しつつ分析した。『アフリカの女』は 1865 年初演ではあるが、異国趣味にもとづいた壮大な叙事詩的世界の構築によって、世紀前半に流行し始めたグランド・オペラの要素の一つである異国趣味を世紀後半のオペラのそれへとつないでいることが理解された。

(5) ジョルジュ・サンドの作品について、主に『コンシュエロ』を中心に、教会音楽と世俗の劇場音楽をめぐる空間的な敷居と、ベネチア特有の地理を踏まえた流通と回遊の仕組みの関連性を分析した。メリメの『カルメン』については、ビゼーのオペラ作品と比較しつつ異国性と境界の問題を探った。複数の地方性や言語のあいだの差異が独特の緊張をはらんだ地理を構成し、恋愛心理のからくりと連動していると同時に、異国性とは異なる「彼方」の概念が導入され、ミクロな敷居で囲われた場や閉塞した場と関連して作品の力学を支えていることなどを考察した。

(6) オノレ・ド・バルザックの作品における境界と異国性の問題について、『モデスト・ミニョン』、『ウージェニー・グランデ』等にあらわれた異国のヴィジョンが、直接的には東洋との貿易や植民地の構築をめぐる社会的事象を軸として提示されながら、私生活の微細な敷居と密接に結びついて機能していることを見た。さらには食卓、庭、サロンなどいくつかの生活の場が、『人間喜劇』を縦断し、その動的な世界を支えているさまざまな流通路とそこに点在する多種の敷居を喚起しつつ、物語の生成に必要な敷居を形成する仕組みを分析した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 博多 かおる、《 Les partages de la table 》, in *L'Année balzacienne 2018*, 査読有、Presses Universitaires de France, pp.51-64.

② 博多 かおる、『カディニャン公妃の秘密』の庭、『仏語仏文学研究』、査読有、第 49 号、pp.255-273, 2016 年、https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp

〔学会発表〕（計２件）

① 博多 かおる、《 Les Partages de la table 》, シンポジウム Balzac et la représentation de la Table, 大阪府立大学 I-site なんば、2017.

② 博多 かおる、《 Traduction des bords de la mer ― palimpseste des rivages balzaciens et japonais 》, Europe/Asie : récits, réemplois, réécritures. Colloque international : imaginaires maritimes, Université du Havre, 2015.

〔図書〕（計 1 件）

① 博多 かおる、他、Balzac et la Chine/ la Chine et Balzac, Presses Universitaires de Rouen et du Havre, 2017, 237.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。